哲學研究　第二十六號　第三卷第五冊

喜劇と妄想

今村新吉

一

茲に掲載致しまするものは、元、昨年十月京都醫學會總會の席上で講演したものでありますが、それを多少訂正增補致しまして、本會々員の高覽に供し、若之に幾何かの價値があると御認めになつて御批評並に高敎を承る事が出來るならば甚光榮であります。

扨只今記述せんとしますのは、昨年春在佛中に思ひ付たるものを根據として、少數の參考書より其材料を取たものでありますから、未だ完璧のものとは申せませんが一定の研究方針を指示するに足るであらうかと思ひますので、敢て發表するに至た次第であります。

私は紐育のメトロポリタン、オペラハウスでマノン、レスコ劇を聞きました時、其奏樂や唱法には誠に感心致しましたが、伊太利語を使ひましたものですから、意義を解することが出來ませなんだ、然るに其後佛國へ參りましてから、間もなく同じ劇がオペラ、コミックで演ぜられると云ふ廣告を見ました。此劇の原著者は佛國人で、亞米利加の時と違て、佛語で歌唱するんですから、是非行かなければならんと思ふて出懸けました處、初のウヴエルテユールの音樂は餘り氣に入りませなんだが、次第々々に役者の唱ひ方とか動作とか掛合とかに興味を覺ゆる樣になつて來ました。御承知の通り佛語の所謂「レスプリー」は世界中で佛國が最發達して居りまして、又同國人も之を誇と致し、佛國での「フエール、ド、レスプリー」と云ふ語ふ語は、他國には適當のものがないと聞てる程特有のものでありますが私が見物してる中に特殊の興味を覺へて來たのは、則ち此「レスプリー」であらうと氣が付たので、それから之を究める樣に心懸けて居ました處、モリエール作のドン、ジユアンがテアトル、フランセーて興行すると云ふのを聞きまして、見物に行たのが、佛國喜劇の見初めでした。此モリエールと云ふ作者の大家であることは誰でも知てますが、只大家と云ふ丈ではなく、世界中で獨特で、同じ毛色のものは外にないと一般に云はれて居りまして「ゲーテ、ゴロワ」なる

異名を呼ばれたモリエールを、本家のゲーテが評しまして同氏の作物は到底獨乙人には解することが出來んと云ふた位に佛國の專賣物であります。それから後に或「マチネー」でコルネーイユの「オーラス」とモリエールの「吝嗇爺」とが一緒に興行されました。卽ち正劇中の最眞面目なものと、喜劇中の最可笑しきものとの對稱でありまして、此二劇を同一日に續け樣に見ましたのは、一生中後悔する樣のことは決してないだからうと思ふ程の印象を私に與へたのであります。扨此劇中に現はれました人物の心理學的分析を基礎としまして、慢性妄想狂の病的思想、特に思推妄想の起原に就ての見解を演べやうとするのであります。

曾てロンブローゾが「天才と狂人」と題する書物を著したのが刺戟となりまして、獨國のメービウス、佛國へ逃れたマックス、ノルダウが唱道し出して大文學者、大美術家の生活狀態を研究し、其大多數を精神病者に算入しました、例へばゲーテやシューマンは躁鬱狂者で、ジャン、ジャック、ルッソーは高等變質者であるとか、ストリンドベルヒは追跡被追跡者であるとか、ニーッシエーは痲痺狂になつたとか、トルストーイは其晩年に憂鬱發作を患たとか云ふ研究が近時山積して居ります。然るに劇に現は

るゝ人物の心理學的研究は甚尠い樣に思はれます。尤もジャネーはシェクスピア作のレデイ、マクベスを「ヒステリー」の睡遊狀態に引證したとか、又マイネルトは憂鬱症の病的心理狀態をばバイロンの句を借りて說明したとか云ふこともありますが皆總て斷片的で、偉大なる作中の人物に就ての評は主に文學研究者に委ねて居て、心理學者や精神病學者は之に與たことは、餘りない樣でありますす。で私は今前申しました二劇中の人物に心理的觀察を試みやうと思ふのであります。

先づ一寸「オーラス」劇の梗概を申しますと、羅馬のオーラス家とアルブ國のキユーリアス家とにはどちらにも男兄弟が三人ありましたが、キユーリアス家の娘サビーヌはオーラス家の息子の嫁になつてるから、兩家は姻戚の間柄でも、其上又オーラス家の娘カミーユはキユーリアス家の息子と相思の仲でありますが、此樣に兩國は互姻は通ずるものゝ兩國民の仲は惡くつて爭鬪の絕間がないのです。で遂に或時に兩國から各代表者三人宛を出して最後の戰をなし、其勝た方の國が兩國の主權を掌握しようと云ふ談判が決まりました處が、圖らず此代表者として右兩家の息子共が撰ばれまして、遂にオーラス家の息子二人は討死しサビーヌの夫であるオーラスは一旦遁走しましたが後に此者一人でキユーリアス家の息子を塵にして、茲に兩國のク、

主權を羅馬に收めました、此偉勳あるオーラスは凱旋後に妹のカミーユから戀人を殺したと云ふとで怨まれ、且散々に毒付かれましたので、怒つて、妹を殺して仕舞ましたが、父が國王に命乞をして呉れたので罪を免されたと云のであります。

こう云ふ筋書ですからオーラス家では兩家の孰れが勝つにしましても、其姻族の滅びる譯ですから、苦痛であります、尙箇人に就て考へますれば兩家の息子が果し合に臨む際には、其我國に對する愛と、武士の意氣地とから私情を忍んで、姻戚を犧牲に供せんとするのでありますし、サビーヌは已にオーラス家の主婦となつてるですから、現在の家族を愛する爲には、生家を忘れねばならんと云ふ心の爭がありますし、カミーユに至りては戀慕の爲には寧ろ自分の兄弟も本國も咀ふて顧みないと云ふ終始一貫せる至情の爲に、歐米人から甚しく賞讃されて居ります、併しオーラス老翁は羅馬國を生命とし之が爲には如何なるものを犧牲としても否まぬとは云ふものゝ、一方には又普通の如くに、我婿なり嫁の里なりに對する愛情も充分にある人のですから、之の感情は甚混亂錯綜して居ります、だが結局國士としての處決は誤らなんだのであります、今此劇にある臺詞の一二を拔萃しましやう。

オーラス　父上ーま此氣の立てる女を抱き止めて下さい。
御願ですからどうか何よりも先づ外へ出さん樣にして頂きたいのです。
ひよつと恩愛に惹かされて喚かれたり泣き出されたりしますと、
あり々々と私の腕が鈍るに違ひありますまい。
私と此女とは緣組してるからそれで世間から、
拙い仕組をしたなと云はれても仕方がありません。
若しか私に少しでも卑怯らしい素振がありますと、
國家の代表者だと云ふ名にかゝわります。

「老翁」　よしそれは私が引受けるから、早く出陣しなさい、兄弟が待つてるぞ。
お前は只國家の義務と云ふことを考へて居ればそれでよいのだ。

キユーリアス　私は此期に臨んで何と御挨拶申上て宜敢いやら……

「老翁」　ああ、そんなことを云はれると己れも氣が弱くなる。
己は何と云ふ語でお前等を勵ましていゝか分らない。
私にもしつかりした分別は付かん。
今の別は己れに取ても試に悲しい。
去りながら何事も運命とあきらめて義務を盡しなさい。

第三幕　第五場

（兩家の鬪士已に戰場に向へり跡に殘りしサビーヌ及カミーユを慰むる語として）

「老翁」

お前等が悲みの涙にくれるのは尤だ。
己だつてそれを辛抱するのは骨が折れるに相違ない。
若し己がお前等と同じ境涯だつたら。
矢張り身も世もなく悲しむだらう。
アルプ國から撰ばれたとてお前の兄弟を惡みはせん。
己に取つては三人共皆前通り親しい仲ぢや。
だが只の義理仲は戀や血緣程。
深いものではなけれどそれ程强味もない。
サビーヌは兄弟を案じるのだし、カミーユは戀人を氣遣うんだが、
己はお前等程あの人等のことでは心を痛めない譯だ。
だから己はあの人等を我敵として見ることも出來れば、
悖等に勝たさうと思ふても少しも悔まない。
有難いことには悖等は國のお役に立つことになつたんだ。
逡巡はずに出陣したのは天晴だ。
雄々しくも二度迄恩愛の羈を振切た其時に、
私の悖は又一段其名を揚げたんだ。
若しや心弱くて人に憐みを乞ふたとか、
人の賴を聞く樣な意氣地ない男であつたりして、
卑怯未練な振舞で私の面を汚したら、
其場を去らす我手で成敗したらう。
悖には定めし不本意だらうが若しや他人が出てたならば、
何を隱さう私の願もお前等とは違はしない。
若し神樣が私の聲を憐と聞こしめさば、

アルプ國では外の勇者を撰ぶことになるだらう。
さすればオーラス家の者共はキユーリアス家の血で
其手を汚さずに名譽の凱旋をするに違ない。
そして血で血を洗ふ樣な戰をせずに、
羅馬の名譽が揚がるだらう。
けれど細心なる神樣は左樣になされなかつた。
己は何事も神樣任せと決心した。
それには氣を大きく持つて度胸を定め、
國民の幸福は取りも直さず自分の幸福だと云ふことにした。
お前等も悲みを少くする爲に私に見倣なさい。
篤と考へて御覽、お前等は二人とも羅馬の女じやないか、
お前はさうなつたんだし、お前はまだそうだらう。
羅馬の女だと云ふことがお前等の身には尊い寶だよ。
鳴り響く雷神の樣に羅馬が、
全世界を慴かしめる日はきつと來る。
其時こそは世界の人は讃んで羅馬の法律に遵ひ、
此偉名はやがて我王家の譽となるぞや。
此光榮の來ることは已に神樣が建國者エーネに御約束になつて居る。

此オーラス老翁に扮した老優シルヴエンが其臺詞の間に胸中の苦しみやら同情やら、最後に我が決する處に向て進む勇氣やら、心の此複雜なる戰に對して適當なる表情を巧に演出しました至藝に私はひどく感心しました。我國の劇殊に時代物に

於ては此筋によく類したものがありますし、又此如き觀念は吾々の國民性でありますから、感興を惹たのか知れませんが泰西人の心をも動かしたものと見えます。今文句其者に就ての批評の一二を擧げますと、辛酷なる批評家として有名なウォルテール氏も第二幕第八場の老翁に就ては、此樣に偉大なる心の苦痛と落付との相混淆錯綜したる立場のものが、まだ外にあるかも知らんと思ふて古からのものや外國の劇迄探したけれども見付からなかつた、只希臘人には此く迄の趣が全くなかつたことを述べて置かうと云ひましたし、又セーン、マルク、ジュラルデンは一見老翁は慈愛を知らん樣だ、假令それ迄いかんにしても普通に云ふ柔しいと云ふものが缺けてる樣であるが、よく味うて見るとそうではなくして娘や嫁の心根に同情して兩人を慰め、又我子に就ては假令名譽が減るにしても危險の尠くなることを望まんでもない、世間普通の愛情があるんだと云ふて第三幕第五場の臺詞を引證して居ります。

此老翁の處決を見ますと、道德的感情なるものは甚複雜で、之に因て處決する場合には、種々の感情の爭から來る苦痛が如何計りであるかと云ふことが充分分ります、又「道德的信仰の本態は、主觀、客觀の兩方面に於ける通有性に合致せんと志望する事である、我善なりと信ずるものは、衆人にも條理的に見えざるべからずと爲すもの

にして、道德的格言の價値を眞面目に信ずる時は我固有の欲望を滿足せしめん爲とか又は他人の欲望に因り決して所信を變じ得るを許さず、從て只箇人的範圍に止まる道德的懷疑と云ふものはあり得ない、懷疑を挾む爲に不安を受けるものは、自己自身のみに止まらず、其不安は經驗と一時との慾望だとか其時の蟲の居所だとかの間の不調和を意味するものではなくて、經驗と吾人の社會的及箇人的自我の固定的なる習慣との間の不調和を指すものとすして現はる」とのルユイッセンの言を此のオーラス老翁は適切に現はしてるのが見へます。

今色々の感情が同時に現はれて居ります時、其輕重を道德的判斷から査定しました上、重きに從て事を處しまする際に、其査定の度量衡となるものは、前に述べました吾人の社會的及箇人的の見地、則ち自他共通の目標でありまして其目標の示す輕重の度は感情の道德的分子の價値でありまして、それですから感情に因て判斷する場合には、其評價は複雜でありまして、爲に叡智のみによつて爲す判斷卽ち普通論理學とは原則的區別のあるものと見へるので、已にブレーズ、パスカルも其著述「思考(パンセー)」の中第八章第十九節に

順序(聖書は順序を有せずとの反論に對して)―情は其順序を有す。智は固有のものを有し、

こは原則及證明に因る。情は是と異なるものを有す。人が愛せらるべきものなる事は其の愛の原因を順序的に叙述するに因て證明せず、然らざれば奇怪ならん。

耶蘇、聖ポーロは慈愛の順序を有するも智の順序を有せず、其故は彼等は人を熱中せしめんと欲し教示せんと欲せざりき。聖オーグスチンも亦同じ。此順序は主として常に趨爵を示さんが爲めに之に關係ある各點に就きての岐路辨論にあり。

又其第二十四章第五節に

情は理性の知らざる理を有す、人之をよく知る。吾は曰はん情は其耽る處に從ひ自然的に普通實在を愛し或は自然的に自我を愛す、而して其撰擇に因て或は前者を或は後者を阻む。諸君今其一を排し他を採るとせよ、諸君の愛するとは理性に因るものなるか、神を愛しるは情にして理性にあらず。信仰と稱するものは、卽ち是れり、神は情には感ぜらるゝものにして理性には然らず。

と云ふて居ります又其時リボーも之に就て特別に研究し、感情論理學なる書物を公にしました。

此感情論理學は感情を根原に致しますから、普通論理學の立論とは違ひまして其主張に對して立證する事も反駁するものも出來ないのは明でありますが、自他をして確信せしむるといふ點に於ては、普通論理學で得た斷定と其度を異にするとは申されません、只其材料の異る爲普通論理學にては正確を旨とし、感情論理學では心を動かすを目的としてますもので、他人に自分の主張を確信せしむる方法として修辭

學が興たのでありまず、彼のシェーンタウイッチの「クヲオ、ヴディイス」中にある聖ペトロの言と、アナトール、フランスの「タイス」中にあるパッフニユスの辭とを較べますと孰れも巧には違ひありませぬが尙其人の情を動かす上に深淺の度種々あるといふ事が分ります、

一般に世間の人は普通論理學の型式から得ました論斷には動かすべからざる眞理が存在するものと考へて、假令自分の欲望より見て少々不滿であるとも、之に服從せねばならん程に思ふて居りますが、果してさうでしやうか。今其最精確で且單純なる三段論法に就て考へて見ましやう、此三段論法なるものは、そこに二項ありまして、其一項が他の一項に含有せられてる場合には、大なる項に從て小なる項より論斷を下すべきものでありまして、ビネーの著「立論の心理學」中に擧げたる通りオイレルに從ひますと、大なる項は大なる圓に比すべく、小なる項は小なる圓に比すべきもので、小なる圓は大なる圓中に包含せらるゝから、小なる項から大なる項に從て論斷して誤らないものだと云ふので、古來最精確なるものと認められて居りますが併し初めスチユワート、ミルが其「論理學」中に於て之に對して疑を抱きまして、若し大項なるものゝ中に已に小項なるものが包含されて居るものとするなら、此論斷から、新事實

を得るものでないから、勞して效なきものであると云ひました。此說は至極最でありまして、普通の考から見ましても、例へば「凡ての人は死すべきものなり」「シーザーは人なり」「シーザーは死すべきものなり」とは三段論法の示す處でありますが、其小なる項は既に過去に屬して居るものですなら、同氏の云ふ如く實際上此論斷により新知識を增すものでありません、只小なる項の現在又は未來にある爲に、我々が未來に如何なることが起るかと云ふことを知らうとする處から、此論法を必要とするのです。

併し未來に於て、シーザーは必ず死すと何人か云ひ得ましよう、萬一シーザーが死なゝい時は大項も之が爲に破れます、從て此論法は循環論法であつて、謬てるもとせねばなりません。之は已にヘルムホルツも生理學的光學提携中の無意識的判斷なる章中に陳べてありまして、此の如き判斷は一般的命題を構成せずとも、直接に一定の場合を既知の場合と比較するに因て、同一の確信に達し得るは明なるのみならずして、歸納より論斷する、普通一般に行はるゝ同一原始的の方法なり、只一般的命題なるものを設くる爲に之に因て容易に記憶中に保存し、且他人に容易に之を告ぐる便あるの外、新生の出來事を普遍的のものゝ正確度に關して調査する際、各例外を一層強く吾人をして矚目せしむ、卽ち若し例外ある時一般的定說を以てせば過去の箇々

の場合を照會するよりも寧ろ強く其有效性に對する制限を思はしむ。此の言でも解る如く三段論法にも其の絶對的眞實は疑はしいものであるが、普通吾人の生活上には此論斷は必要であつて、又其殆んど過誤のないのは抑何の爲でしやう。其未來に於けるシーザーの死ぬか死なぬかを決定するには、シージーなるものと同樣なるものに於ける經驗よりして、寧ろシーザーなる人の將來は死すべきものなりと推測を下す方が誤なきに近しと考へるのに外ならぬのであります、卽ちシーザーは死すべきものなりとの推測と、死せざるものなりとの推測との價値に於ける輕重に因て論斷するのでありまして、之が爲に吾人は未知の知識を啓發することが、出來るのです。

茲で普通論理學と感情論理學とを對比して見ますに、古來此兩者は相容れざるものと稱せられ、甚しきは正反對のものとすら認められて居りましたが、私から見ますとそれは寧ろ皮相の見解らしく思へます。世人が兩者の間に此の如き差異ありと考へたのは、多分普通論理學から得たものは其誤が比較的少く、感情論理學よりしたるものには誤が比較的多いと云ふ苦い經驗から出たものでありましやうが、只今述べました通り普通論理學の論斷も絶對的眞理でなく只之れに由て得たる論斷は其反對論斷に較べて價値が高いと云ふのに過ぎないのであるとも云へますから、矢

張感情論理學と同樣に價値の評價でありますそれ故兩者の間には原理的相違はありません、只其價値秤量に用ゐる材料が違てる丈です、卽ち前者は其材料を叡智界に求め、後者は感情より求める事の相違があるのみであります。

扨論斷を感情論理學より下しまするのは、普通論理學より下しまするより困難でありますが、其困難である主なる原因は種々の感情價値を叡智眼に照して比較を要することであります。今少し詳しく反復しますと、叡智界のみに止まる判斷は時間と空間とに還元し得られる事象丈の範圍に止まるのですが感情界のものになりますと、そう簡單には參りませんで、全く性種を異にしてるものに就ての比較が主ですから、困難であると同時に誤謬が生じ易いのです。前に申しましたセーン、マルク、ジュラルダンのオーラス劇評中、老翁は只管國家と云ふことを思ふてるから、其子よりも國家を愛したのだと申して然るべきかと云へば、そうではない。老翁が其子に對するの情は普通人と同じき慈愛である、此慈愛と云ふことは愛情の上から申せば優しいものと見るべきであるが、國家に對する愛情は萬難を排し凡ゆる苦痛を忍ぶの固き決心を以てする男らしいものであると云つてます通り、簡單直接に其子と國家との間に於ける愛情の厚薄を論ずべきではない。して性質の異る二の情が同時に老

翁の胸中にあつて、只處決するに向つての感情の依數に大小があつてこの評價によりて處決を誤らなかつたのであります。

二

今迄は眞面目な人間生活に於ての判斷、行爲の處決に就て述たのでありますが、之からは正確な判斷を要しない不眞面目なる方面に移りませう。

人間は眞面目一方でありますと我々の精神は常に緊張の狀態に居りますから堪へられません、それで時々努力を弛める爲、氣保養を致しまして醒覺時で疲勞の恢復を圖ることになつて居ります。併し何にもせずに只居ると云ふことは普通の人ですと退屈で反て苦痛を感じますし、それかと云ふて正劇見物などでは感情の動搖が餘り烈しい爲に、休養處ではなく益疲勞することゝなりますので、特殊の娯樂的演藝が自然に起て來たのであります此娯樂的演藝には落語とか、俄とか、大神樂とか、輕口とか、茶番とか、狂言とか、馬鹿踊とかがありまして、其最發達したものは所謂喜劇と稱するものでしやう。是等は孰れも皆可笑しきものでありまして、見物を笑はします、此可笑しいと云ふことを保養的娯樂に應用しますのは、此時でも一定の感情を起

して居るとを其人自身も知ては居るが、之があるかと云ふて眞面目になるものではないからで、卽ち憤怒とか悲哀とか喜悅とかの如き他の眞面目の感情が明に現はれました時には、既に何時しか可笑が跡を納めて居るものです。此點から考へますと、笑と云ふものゝ續いてる間は其對象物に卷き込まれながらも、本當に卷き込まれずに居るのであるから、眞の同情と云ふものは起らないのでありますし、又他の感情では其度が增せば自分か之を感じてると云ふ心持も增して行くのが一般ですが、笑では其度を增す程どちらかと云へば反て其自覺が尠くなる樣な傾向のありますのは、俗に所謂「我を忘れて笑ふ」と云ふ語があるのでも分ります。それですから前申しました樣な藝當が何と云ふことなしに只觀客を笑はすのは、人心休養上甚合理的であります。今少しく詳しく笑と云ふことを調べて見ますと、之と喜悅と最近い表情である樣に、氣分から申せば發揚に屬するのは明かで、通常自分が他より優越したる地位に立てる時に現はれますが、尙笑はすと云ふことは其對象が人間直接の言行であるか、假令人間でないにしても人間との交涉がある時にだけあるのでして、人間と全然沒交涉のものでは起りません。だからベルグソンが「古來人をば笑ひ得る動物なりと定義したものが澤山あるが又笑はせ得る動物なりと定義しても可なりてある」

と云ふたのは甚當を得てる樣に思はれます。他の感情で見ますとそれを出す對象は必ずしも人には限りません。過て頭を何かにぶつけても、其物が癪に觸り、又何か食た時でも其作た人とか供へて呉れた人とかには無關係で、只甘いとか奇麗なとか云ふ丈で喜び得るのであります。之から考へますと笑ふと云ふものは其對象物に於て、他の單純なる感情と趣を異にしてることが分ります。又笑は欠伸と同じく、全く其儘で則ち變化を受けずに他に傳搬或は感傳しますが、それが外の感情でありますと假令他人の其時の感情を見て自分も一種の感情を惹起すにしましても、多少性質を異にしたものであつて、全く同一のものではありません、それで世間でよく用ゆる同情なる語を字義通りに解釋しますと、人の悲みとか喜とか云ふ樣な感情に對して起すの情を名けるよりも、笑の場合に於て最よく當てはまるのです。

笑は自分が他より勝て居る卽ち自己の優秀を自覺する時に起ることが多いと一寸前に申しましたが、茲に、一言附加せねばなりませんのは、單にそれ丈では只得意と云ふ氣持が出るのみで、必ずしも笑を催すものでありません、其時に若干批評的態度に出でゝ、相手の動作が拙いとか鈍なとか、不器用なとか、變であるとか云ふことを認めた時に笑が出るのです。卽ち笑は他の感情程深酷ではないが皮肉であるといふ

事をベルグソンは「笑」の末葉で適切なる比喩を以て云ひ現はして居ります此文句は成瀬文學士著「笑の研究」中にも譯載されて居りますから只今一寸それを拜借しまして此に挾みます。

海の面を見ると底は深い平和を保てるに係らず、波濤は小息なく鬪ふてゐる、打ち合ひ衝き合ひして平均を得やうと努めてゐる、其變轉極まりなき曲線には輕快な白い泡が付てゐる、波の引た後の磯邊には、此泡が殘てゐる、傍に遊んでる、小供が其處へ來て一掬掌中に集めて見ると、忽ち僅計りの水滴と代て仕舞ふので、不思議に思ふが嘗めてみると、此泡は寄せて來た波よりも遙に鹹く且苦い、笑の生ずるや全く此泡の樣なものである、笑は社會の表面に於ける凡ての小さい擾亂を示してる、笑は刹那に此葛藤の變り易い諸相を描く笑は亦鹹いものである、而して泡の樣に輕快であるして哲學者が其數滴を集めて味つてみると其少量の中に多くの苦味を見出すであらう。

此文句から見ますと、笑は社會の表面的波瀾を指示するものであるとベルグソンは解して居る樣に見えるが、悲痛の場合にも尙笑ふ事の出來る日本人に、取ては、此解釋は、面白い事は誠に面白いけれど、まだ物足らぬ心地が致します、此特有なる本邦人の笑は外國人間にはなきもので、其爲に邦人は笑ふ爲に外人から飛んでもない誤解を受ける事もありましたが、又注意深い外國人は、邦人の笑に注意致しまして、彼歸化人小泉八雲氏「慣れざる日本の閃光」中に、日本人微笑に就て特に一章を擧げ其觀察した處を記載して居りますが、其中に名句とも思はるゝものもあります、今簡單に御紹

介致しますに、佛教美術は元來は日本のものではないが、日本國民の笑は此佛教の菩薩の笑と同じ意義のものであつて、克己及自制より出たる幸福の表徴であると申して居りますが、實に最です。即ち笑は其對象が人事であらうとも自分の事であらうとも、自分自分を離れたる立脚地に在て、批評的の觀察を下す時に出る表情であつて、對象事實の輕重とか、深淺とかは寧ろ第二次であると云ひ度いのです、故に笑と一口には申しますものゝ、他の感情に較べますと甚多岐多樣で、頗る複雜なるものであります、今文法上の品詞分類に擬らへて、他の表情を感嘆詞と致しますれば、笑は元自動的或は他動的に發し得らると見ても、丁度働詞の位地に立つものであらうかと思ひます。

偖喜劇なるものゝ沿革はどうであるか、素より門外漢の私でありますから、詳しいことは申しかねます、又謬がないとも限りませんが、察しますに、衆人の中で殊更巫山戲けて人を笑はし興を起さしたのが初であつて、今日尙其程度に止て居るものは、よく曲馬なんかに出て來る「ポンチ」であります、「ポンチ」は主として動作で人を笑はすのですが、語で此種の笑を起さすものは、極幼稚な落語で、田舍出の分らず屋の權助とか、

薄野呂とかを題材にしたものであります。之より少しく進歩しましたのは、「人眞似をなす猿」に擬する興行であります。ですが此の如きものでは一時は一寸笑ひもしますが、興味が乏しくつて感興を覺ゆるに至りませんので、段々と進歩さして先づ劇の形式を帶びさせる樣になりました。此形式にはなりましたが、正劇とは違て實際の生活面より取材しませずに反て抽象的のものであつて、主に自分の見聞したものにかぶれて仕舞たものとか、職業に忠實なる餘り極見易き過誤を惹起するとか、意外の遭遇とか(但し意外とは當事者にのみで觀客には少しも意外でないのです)又は一種の性癖或は感情が度外に發達してをるものとか、甚輕卒で失策を續出するものとかを材料として色々に組合はせ、種々の脚本を作る樣になりました。それですから深酷と云ふ點は鮮い代りに、冷靜に物事を考へさすと云ふ可能性が多ひです。從て世上の利害得失等の問題に觸れて教訓を與へることは、正劇よりも多い譯です。諷刺文學が人を導く上に就て普通の道學的記述よりも時として有效である理由も茲にあるのでしやう。

茲で又一寸初に申して置きました「マチネー」で見ました喜劇モリエールの「吝嗇爺」の一節中興味ある處を述べて見ましやう。

アルバゴン（吝嗇爺）
ネ、娘！今己れの云つてる緣談には誰だつて文句は云へまい、私の見定めたに就てはきつと世間の奴も尤だと云ふに違ひない、己れはどんな賭けでもするよ。

エリズ（娘）
私だつて賭けますわ、理屈の分てる人は誰だつてお父様の云ふことに贊成なんかするものですか。

アルバゴン（遠方にワレールの居るのを見て）
あ、あそこにワレールが居る、此話で己とお前とどつちが理屈があるかあれに聞て見やうと思ふがどうじや。

エリズ
え、よごさんすとも。

アルバゴン
じやお前はあれがいゝと云つた通りになるかい。

エリズ
え、私はあの御方の仰やる通りにしますわ。

アルバゴン
よし分つた。

第一幕　第八場

アルバゴン
ワレールさん一寸此所へ、今己と娘とどつちがいゝかつてことをお前さんに裁いて貰うことに極めたんだよ

ワレール
あなたが御呼びになつたのですか、えゝ宜しう御座います。

お前さんは己たちがどんな話をしたか知てるかい。

ワレール　えーそれは知りませんが、あなたの仰ることに間違のありつこはありません、あなたの仰ることはいつでも理屈に合てますよ。

アルパゴン　己れは今晩、これに金持だし悧口だしする婿を取らさうと思つてるんだが、此馬鹿娘は己れの眼の前でいやだといふんだが一體お前さんはどう思ふかね。

ワレール　私がどう思ふかつて御尋なんですか。

アルパゴン　そーよ。

ワレール　へー。

アルパゴン　どつちだい。

ワレール　本當は私だつてあなたと同じ考でしやう。あなたは間違たことは仰る譯はないと思ひます。ですがお嬢さんだつてまるで間違てや……。

アルパゴン　何だい、ヤンゼムルさんは素敵なもんだよ、品は好いし氣は柔しいし行儀は良いし、悧口でもあるし、それに立派な家を持てる紳士だ、おまけに繼子は一人もない、どうしてこれ以上のお婿さんがあるもんか。

ワレール　御尤です、ですがお嬢さんだつて、何しろ話しが少だしぬけだし……そつちへ行く氣にな

れるかどうか、もう少し考へさして下さいと云つても差支はないでしやう。

アルバゴン　いや愚圖々々は出來ん、甘いことがあるんだ、外の相手では迚もないこつた、娘貰をつて呉れるのに持參金なしで承知なんだ。

ワレール　持參金なしにですか。

アルバゴン　そうさ。

ワレール　それじやもう申し上げることはありません。そんならもうお分りじやありませんか御尤な譯ですから仰る通りです。

アルバゴン　やれ結構々々、大儲した。

ワレール　確にそうです、異存のあらう筈はありませんが、お嬢さんが結婚てものはそう迂濶に決められない、何しろ生涯の幸不幸になるんだし、末永く連れ添はうと云ふ約束だから、餘つ程よく考へなけりやならないと仰やるのも無理じやありますまい。

アルバゴン　持參金なしだよ。

ワレール　御尤ですそれは分てます、ですが又世間ぢや御嬢さんの氣も酌んで上げなけりやならないと云ふ人もありましやうし、歳も大變違てるし、氣分も情合も違つてるんですから無理に不釣合の緣組をさしたんだと云ふものがあるかも知れませんよ。

アルバゴン　持參金なしでだよ。

ワレール　それは分てます、そりやいけないと云ふ人はありますまい、です、が世間には金が要ても娘の氣に入る樣にしてやる方がいゝと云ふ親はないでしやうか、娘の一生を金とは代へないと云ふ親もありますまいか、何時迄も名譽や、平和や、樂のある樣に、似合た仲善の夫婦にしてやることを何よりも大事と思ふ親が澤山ありましやうね……。

アルバゴン　持參金なしでなんだよ。

ワレール　それは分てますよ、それを云はれると閉口です、……持參金なし……これを引込ます樣なことが何かないか知らん

アルバゴン（ふと庭を見て獨語）　あつ大變だ、あそこで犬が吠へてる樣だ、誰か金を盜りに來てるんじやないかしら。

（ワレールに向て）　私は直き歸て來るからそこにじつとして。

茲ではアルバゴンが吝嗇一圖の爲ワレールの云ふことは少しも分らない風に空とぼけて、只「持參金なしだよ」一點張でワレールを說き伏せやうと一生懸命になつてるんですが、一方ワレールの之に從ふ筈がないことは見物には明瞭に分てるが、アルバゴン丈は夢中になつてるから分らずに無駄骨を折つてると云ふことが見物を笑はすのであります。卽ち此劇で夢中になつてる爲に順應性が甚薄弱であつて、社會的交涉が平滑に行き得ないことが分ります。（未完）